小林清親(こばやしきよちか)の光線画

常設展の展示資料の中から、学芸員が毎月1点を選び、その魅力を紹介する「今月の逸品」。ウェブサイトでは資料の見どころを詳しく解説し、展示室では実物をご覧いただける、ウェブサイトと展示室が連動した企画です。

2026年11月の逸品

小林清親(こばやしきよちか)の光線画



「大川岸一之橋遠景」(明治13年(1880))丹波コレクション

11月の今月の逸品では、現在テーマ3のトピック展示「美術に見る人力車　浮世絵と工芸品から」(前期10月17日～11月23日、後期11月24日～12月26日)の中で展示している小林清親(1847～1915)の浮世絵について解説します。

小林清親の来歴

清親は、弘化4(1847)年8月、江戸本所御蔵屋敷(現・東京都墨田区横綱一丁目)に9人兄弟の末子として生まれます。文久2(1862)年、16歳の時に父親が亡くなったため家督を継ぎ、徳川将軍家と共に上洛し鳥羽伏見の戦いに参戦するなど、武士として幕末の動乱期を過ごします。その後、将軍家に従い静岡への移住を経て、明治7(1874)年に上京。この頃より幼い時から好きだった絵の道を本格的に目指します。そして、明治8(1875)年に版元・武川清吉から「東京名所」を5図出版し、遅咲きながら絵師としてのデビューを果たします。

清親の絵の習熟については、上京した頃にワーグマンから洋画を習った、下岡蓮杖(しもおかれんじょう)から写真を教わった、河鍋暁斎(かわなべきょうさい)や柴田是真(しばたぜしん)との親交から絵を学んだ、などの説が伝わっていますが、そのどれにも明確な根拠がなく、はっきりとしたことは未だ明らかになっていません。

光線画について

清親は明治9(1876)年から約5年間、「光線画」と呼ばれる東京の風景を描いた浮世絵、通称「東京名所図」を93点余り刊行します。光線画は、西洋の絵画、銅版画、石版画、写真などから学んだ遠近法や明暗法を取り入れて制作されており、化学染料の赤、緑、紫色を多用した同時代の浮世絵の流行とは異なる、新たな表現を模索した作品群でした。

刊行には2つの版元が関わっており、最初期の明治9(1876)年から11(1878)年頃を松木平吉、明治12(1879)年から14(1881)年頃を福田熊次郎が担当しました。版元が福田に代わった以降も清親と松木は浮世絵の制作を行っていたことから、松木が意図的に福田に「東京名所図」の仕事を預けた可能性が高いと考えられています。松木と福田が出版した光線画にはそれぞれ特徴があり、松木版には油彩画を思わせる重厚な配色や、線の密度で陰影を表現する技法「クロスハッチング」の再現などの銅版画の影響など、対して福田版には、淡く軽やかな色調と、面的な水彩画を思わせる表現などが挙げられます。

作品解説

「東京名所図」は、文明開化以降の新しい事物と江戸時代から続く景色が交差する、明治時代初期の空気をそのままに伝える風景画として後世の人々に親しまれました。今回はその中から、トピック展示のテーマに合わせて人力車が描かれている作品4点を選び、前期、後期に分けて展示しています。以下、簡単に展示作品を紹介します。



図1　東京銀座街日報社

「東京銀座街日報社」(展示期間:11月23日まで)(図1)

版元・松木平吉から最初に出版された「東京名所図」5図のうちの1点です。この5図の初版を示す特徴として、画面を囲む黄色い枠、日本語と英語両方の題名の記載、落款の色が赤、などの点が挙げられますが、当館所蔵の(図1)は、黄色い枠、英語の題名がなく、緑色の落款であることから後摺であることがわかります。題にある「銀座街」とは、明治5(1872)年の大火によって西洋建築に建て替えられた銀座の煉瓦(れんが)街のこと、「日報社」とは、東京で販売した最初の日刊紙である「東京日日新聞」を発行した新聞社のことです。車夫の背後に「東京日々新聞」の文字が記載されていることから本図は、日報社新社屋の前の通りを馬車や人力車といった新しい乗物が行き来する様子を描いていることが分かります。

中央に描かれた人力車の車夫と乗客は、墨色で細かな影が付けられており、西洋の明暗表現を意識した作画になっています。明治時代の浮世絵に見られる強い発色の化学染料は、人力車と、その他わずかな使用のみに留めており、画面全体を淡く落ち着いた色調でまとめています。



図2　大川岸一之橋遠景

「大川岸一之橋遠景」(展示期間:11月23日まで)(図2)

一之橋を対岸から望む景観で描いた一枚です。版元は福田熊次郎。大川は隅田川の下流を指す名称、一之橋は、隅田川と旧中川を繋ぐ竪川(たてかわ)に架かる橋の名称です。本図の中で一之橋は、人力車の乗客の頭上あたりに小さく描かれています。

車夫の前に描かれた人物は「綱曳(つなひき)」といい、人力車に綱をつけ2人がかりで引くことで速度を出す役割を担っていました。足を大きく開いて走る車夫と綱曳の姿から、乗客を急ぎ運んでいる様子を想像させます。

近景は、満月の強い光を受け逆光のようなシルエットで表現されています。シルエットに墨色と茶色の2色を用いることによって、影の中の色の濃淡をさらに細かく描写しています。



図3　三ツ又永代橋遠景

「三ツ又永代橋遠景」(展示期間:11月24日～12月26日)(図3)

隅田川の永代橋上流にある中州辺りを西岸から描いています。版元は福田熊次郎。影が伸びている方向から、描かれた景色は朝日が昇る早朝の頃と考えられます。画面中央に架かる永代橋の奥には、和船と洋船の帆柱が並び、近景には人力車と洋装の男性が大きく描かれます。本図は(図1)と同様に、淡く落ち着いた色調でまとめられていますが、人力車の車輪には明治の浮世絵らしいアニリン系染料の赤色を使用しています。画面の下部中央には、道と人力車の影に沿うように「小林清親筆」と絵師の名前が入れられています。



図4　柳原夜雨

「柳原夜雨」(展示期間:11月24日～12月26日)(図4)

柳原という神田川南岸の浅草橋と万世橋の間に位置する地域の夜景を描いています。版元は福田熊次郎。道行く人が皆傘を手にしていることから、雨の景色を描いていることが分かります。清親は光線画の中で雨を描く際、雨そのものではなく雨の日の空気や光を敏感にとらえ画面に落とし込みました。例えば本図の場合は、空に墨色の濃いぼかしを入れることによって重く垂れ込めた雨雲と雨の日特有の湿度の高い空気を想像させ、人々が手に持つ提灯(ちょうちん)や建物の窓から漏れる明かりが地面に反射している描写によって濡れた地面を表現したのです。

通りを眺める人力車の車夫のシルエットは、鑑賞者の視線と重なる位置に描かれていることから、画面の中に投影された鑑賞者の影ぼうしのようにも感じられます。

今回のトピック展示で焦点を当てる「人力車」は、明治3年頃に登場した乗物です。人力車は、馬車よりも危険性が低く、小回りの利く扱いやすさから人々の足として利用者も多くいました。その広がりは、清親の「光線画」にも人力車が多数登場する点からも読み取ることができます。 2026年3月に開催した「けんばくトークフェス」でのテーマを踏まえた本展示では、清親をはじめとする浮世絵と工芸品の中から作品を選び、人力車を描いた作品を紹介しています。

(山口 希・当館非常勤学芸員)

参考文献

別冊太陽　日本のこころ229『小林清親　“光線画”に描かれた郷愁の東京』平凡社、2015年
『広重と清親－清親没後100年記念』展図録、太田記念美術館、2015年
『清親－光線画の向こうに』展図録、町田市立国際版画美術館、2016年